

WHO 認定の国際標準化された経穴(けいけつ=ツボ)の数は361あります。臨床治療では、それ以外のツボも少なからず使用しますが、ここでは、361のツボに限定して話を進めたいと思います。

経絡とはツボを中継基地にたとえると、ツボからツボへの通信網のようなものです。縦状の通信網を経脈(けいみやく)、横状の通信網を絡脈(らくみやく)と呼びます。

人間の体を左右対称にして考えると、まず、中心線の前面(腹)と後面(背中)にそれぞれ縦に走る任脈(にんみやく)と督脈(とくみやく)という二つ経脈があり、奇経(きけい)というグループの経脈に入ります。その他に、正経(せいけい)というグループの、やはりこれも縦に走る経脈が12あります。ツボの数は左右対称ですから、その2倍の数になります。

ここで、人間の体をおおまかに陰陽に分けてみると、陰の部分は上半身の腹側、手腕の屈筋側(手のひら側)、足の内股側です。陽の部分は上半身の背中側、手腕の伸筋側(手の爪のある側)、足の外股側です。

正経は手の陰陽に各3つの計6つの経脈、足の陰陽に各3つの計6つの経脈があり、全部で12あります。左右合わせると24の経脈ですが、左右対称ですから、同一の経脈と考えますので全部で12ということになります。

手の陽の部分には、大腸経、三焦経、小腸経があり、手の陰の部分には、肺経、心包経、心経があります。

足の陽の部分には、胃経、胆経、膀胱経があり、足の陰の部分には、脾経、肝経、腎経があります。

おおまかな形状で分けると、胃や腸のようにホースのような空洞臓器(腑)の名前のついた経脈は陽の部分にあり、中身のつまった実質臓器(臓)の名前のついた経脈は陰の部分にあります。

手をバンザイして直立すると、陽の経脈は手の先から足元へ下行し、陰の経脈は足元から手の先へ上行します。本来ならば陽(発散)は上行し、陰(収束)は下行するのですが、生体機能によって、陰を上昇させ、陽を下降させています。

正経の12の経脈は次のような順に繋がって、上行したり下行したりして体内を一周します。【肺経→大腸経→胃経→脾経→心経→小腸経→膀胱経→腎経→心包経→三焦経→胆経→肝経】

施術者は、それぞれの症状に合わせて、どのような経絡のツボを使うべきか判断します。たとえば、のどや気管支や肺の調子がおかしくなると、肺経のツボに異常が現れます。施術者は、体表を経絡に沿って片手で軽くなでるようにして触知して、ツボを選択します。

私が基本にしている長野式鍼灸では、肺経と相性の良い他の経絡(大腸・脾・胃・腎・膀胱経)のツボとの組み合わせによって、より増幅した効果を発揮しています。

ここで改めて、経絡とはいったい何なのか、考えてみたいと思います。

経絡の概念は、臨床上の経験の積み重ねによって作り上げられたもの、として考えられています。

経絡には気・血・津液が流れる主要経路としての役割があります。これは、現在の解釈にすると、血管系やリンパ管系を含む概念です。

また臨床上、経絡によって特定の場所とは離れた場所から機能的に影響を与えることができます。たとえば、首すじの筋肉の緊張を足首のツボを使って弛緩することができます。

またツボに鍼を刺し、手技によって生体に刺激を与えると、経絡に沿って鍼灸特有の「ひびき」が走行するという側面もあります。これは、経絡が神経を含む概念であることの現れだと言えます。

現代医学的になると、経絡とは、生体を縦走する内蔵体性反射系の連なりであり、その実態は脈管外体液(東洋医学的には津液のうちの主に津)であると、考えることもできます。

長野式鍼灸では、内蔵体性症候群として、過敏・鈍麻を内蔵知覚反射、圧痛を伴う硬結を内蔵運動反射、色素・沈着・斑点を内蔵栄養反射、冷え・血腫様の腫瘍・丘疹を内蔵交感神経反射として捉えています。

鍼灸治療とは、体表に現れた病的反応点を察知し、体性内蔵反射を通して生体に様々な刺激を与えることによって自然治癒力を喚起して、ホメオスタシス(生体の内部環境の恒常性)を保ち、未然に病を防ぐ(未病知)ことに尽きるのではないのでしょうか。